

調 査

中学受験の（ホンネ）

Social
Issue
Lab / **SIL**

2025年11月27日

（過熱）する 中学受験。

近年、学びの環境が早くから多様化する中、中学受験の過熱ぶりは、家庭だけでなく社会全体の教育意識を映し出す現象となっている。

子どもは学びと結果の狭間で葛藤し、親も期待や戦略に心を奪われる場面が増えることも。受験の目的が合格のみに置き換われれば、子ども自身の成長の実感や主体性が損なわれる危険性も拭いきれない。

しかし、こうした現状は単なる家庭の問題ではなく、受験そのものの構造や仕組みが生み出す側面も大きいのではないだろうか。

熱を帯びる今だからこそ、親子のホンネに耳を澄ませ、改めて立ち止まり見つめ直す機会になることを願って。

Survey Overview

調査対象者/回答者数

- 一都三県（東京都 / 埼玉県 / 千葉県 / 神奈川県）の
- ・ 中学受験を経験した中学 1～3 年生 + 親：103ss
 - ・ 中学受験を経験していない中学 1～3 年生 + 親：94ss

調査方法

CLT 定量調査、インタビュー調査
※インタビュー調査は、
CLT 定量調査の回答を踏まえ親子 18 組を抽出

調査期間

2025 年 8 月 23 日（土）～ 8 月 24 日（日）

調査企画

QO 株式会社

調査内容

- ・ 受験のきっかけと判断プロセス
- ・ 受験準備と環境整備
- ・ 親子の関わりとコミュニケーション
- ・ 子どもの学習意識と体験
- ・ 受験期の負担と制約、印象に残ったエピソード
- ・ 受験結果と受験勉強に対する評価
- ・ 再受験意向や受験に対する価値観

親子の (ホンネ)とは。

中学受験をする家庭では、
小さな子どもが毎日のように塾へ通う姿——
親が情報を集め、悩みを分かち合う姿——
そんな光景が日常の一部として存在している。

しかしその背景には、競争や大きなプレッシャーが家庭や親子関係という、本来は安心できるはずの場所にも入り込んでいる現実がある。小さな子どもにとっては逃げ場のない環境となることに加え、努力や苦労よりも、成功体験ばかりが前面にでる構造が見え隠れする。

また、高学年になるにつれ、受験は次第に慎重で複雑な道となり、子どもの努力や主体性に向き合う時間も試される。

初めは子どもの希望から始まったはずの挑戦が、いつしか「結果」に押される中で、親子はどのようなホンネを抱えているのだろうか。親子のホンネから、中学受験が持つ特有の構造が見えてきた。

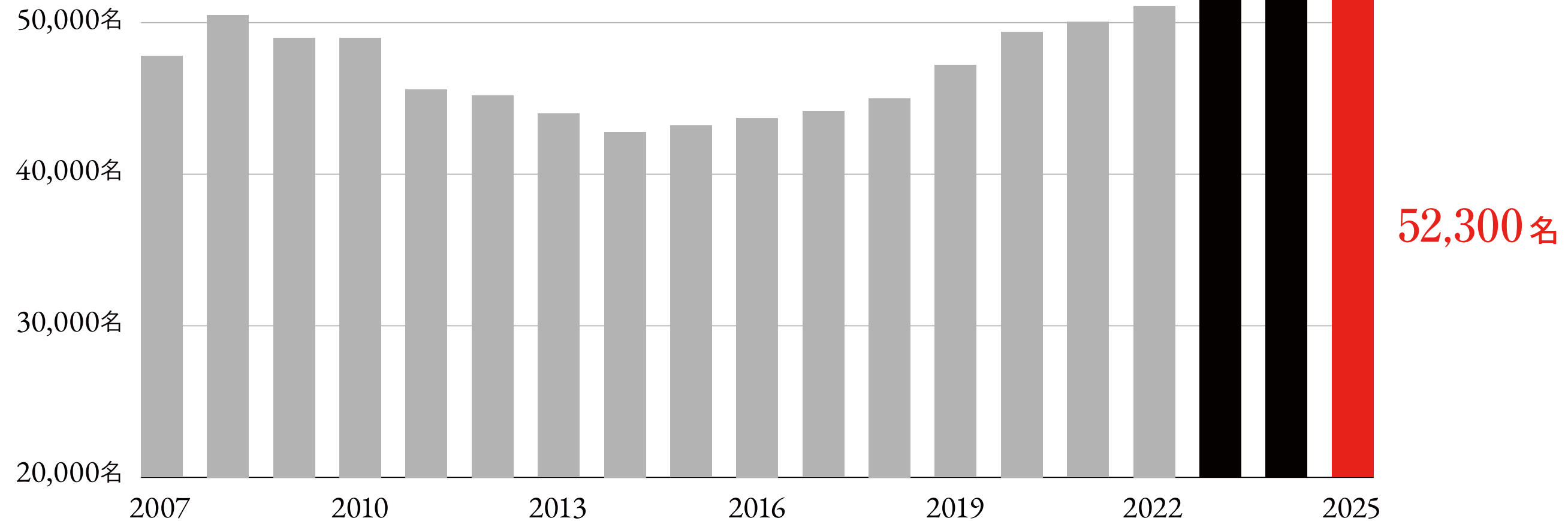
論題 1

（過熱）する中学受験

中学受験の現場で起きていること

論題 1

中学受験のボリューム実態

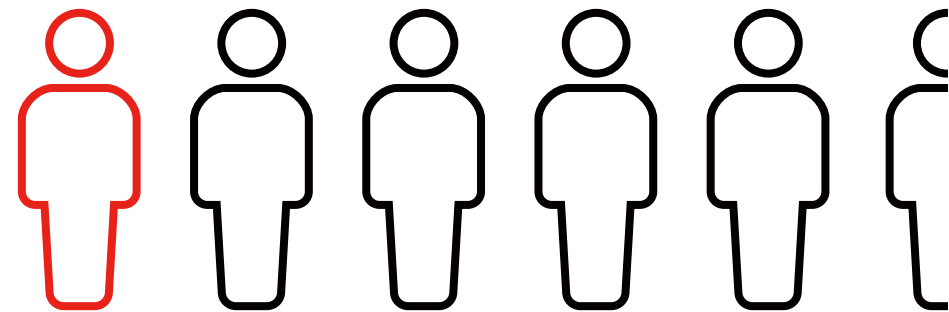


出典：株式会社 首都圏中学模試センター、2025年「1998～2025年入試までの受験者数の推移（私立・国立中学校）」より作成

東京圏（一都三県）における
私立・国立中学校の受験者総数は、
「52,300名」と過去40年で3番目に多い。

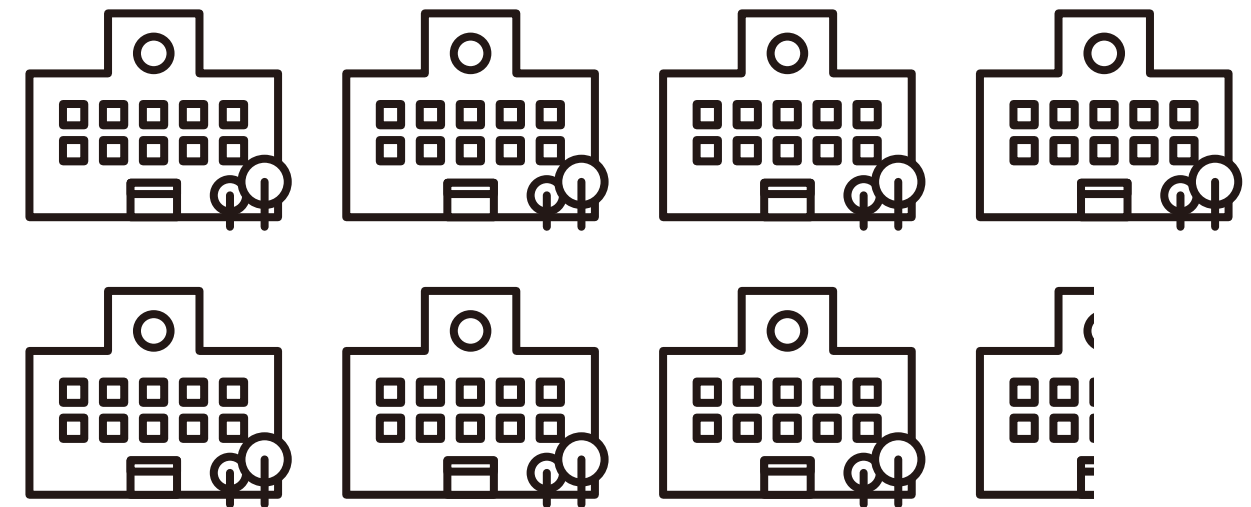
東京圏（一都三県）では

**（5.5）人に1人が
私立・国立中学を受験。**



一人当たりの平均出願校数は

平均 7.4 校





区パパ@塾

志望校に受かるには、親も中受の勉強して、過去問解いて把握していないと子どもにコミットはできない。



ママ@中受垢

中受組は小3の終わりまでに小6の内容を習得しているので、小4から始めるには塾や宿題に加え、さらに6時間追加で勉強が必要。小3までに初めれば差がつけられる。



XXママ@小5息子中受伴奏

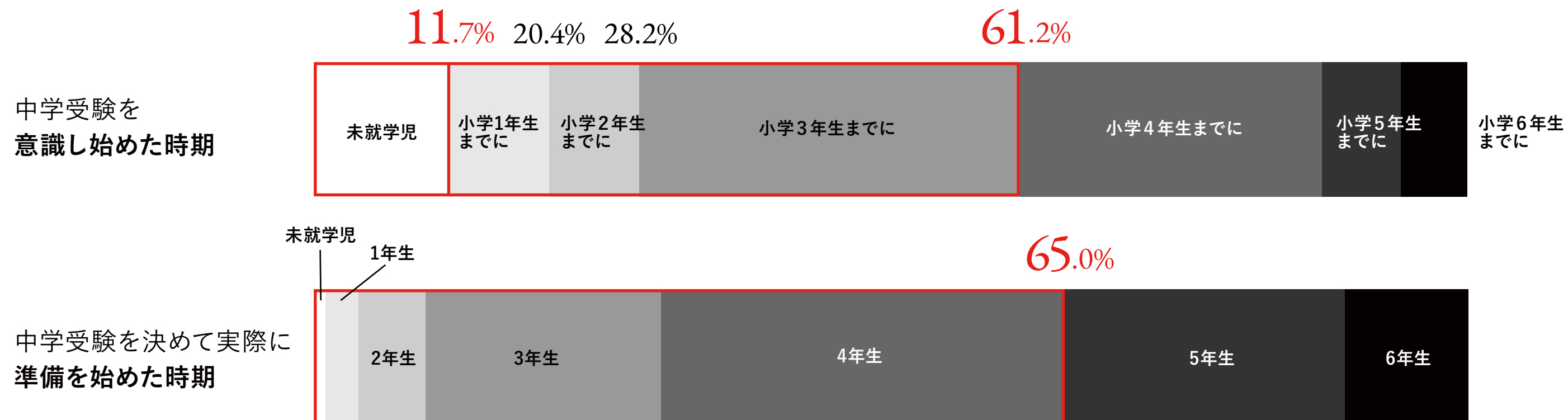
知り合いでは中受のために母親が退職するパターンがかなりあるんだけど、親がかなりサポートしないといけないし、やっぱり共働きには厳しいかな。



中受お母さん@20XX受験予定

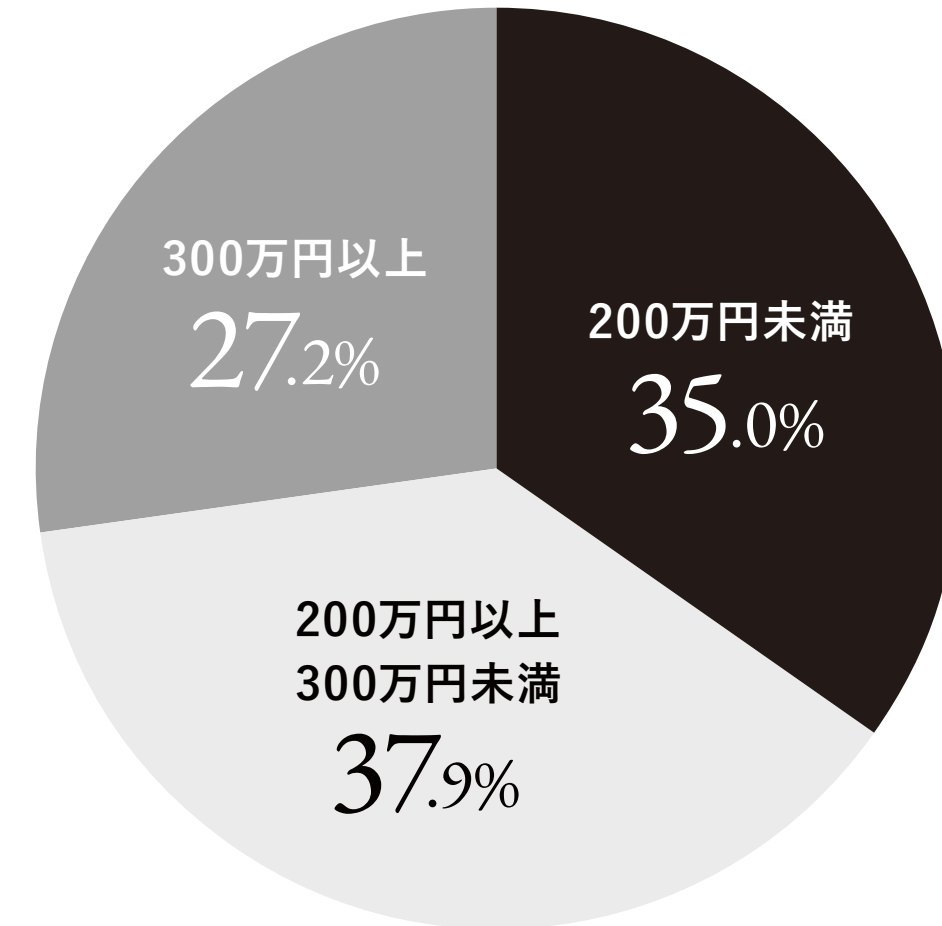
全落ちは絶対にダメ。親の意思で中学受験をする場合、どんなに低いレベルの学校でも、必ず私立に入れてあげるべき。子どもは「勉強させられた」という記憶が残るから。

SNS上では“**中受垢**”による、
「中学受験の常識」や「〇〇すべきといった」投稿が
盛り上がりを見せている



受験経験者の**6割強**が小学校3年生までに受験を意識。
そのうち未就学児が**1割強**と、小学校入学前から意識しているケースも一定あり。
また、**7割弱**が小学校4年生までに準備を始めている。

平均 **(239.0)** 万円



中学受験にはかなり高額のコストがかかっている。
300万円以上かかっている家庭が**4世帯に1世帯**もある実態。

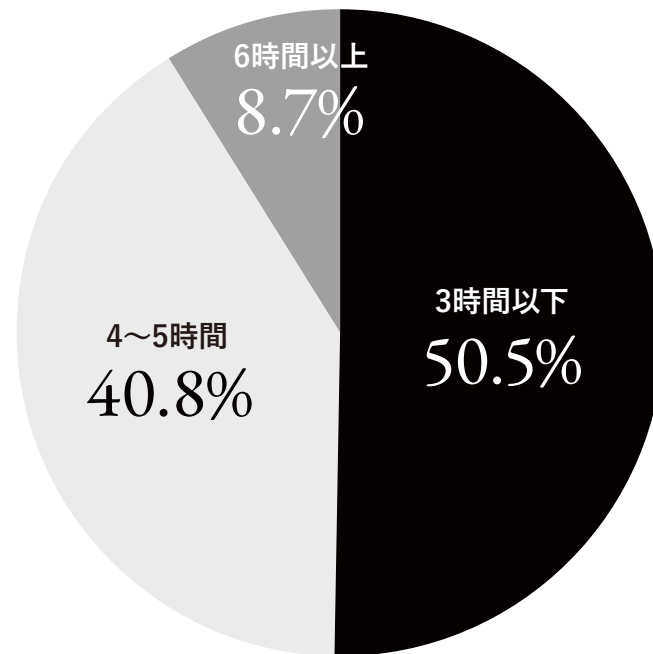
論 題 1

中学受験生の実態

平均勉強時間(平日)

3.6時間

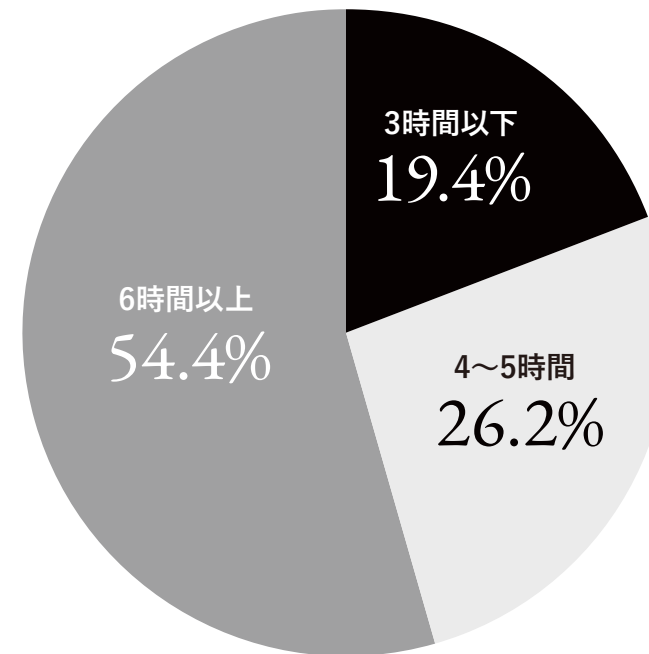
一都三県/受験経験者/子ベース (n=103)



平均勉強時間(休日)

5.7時間

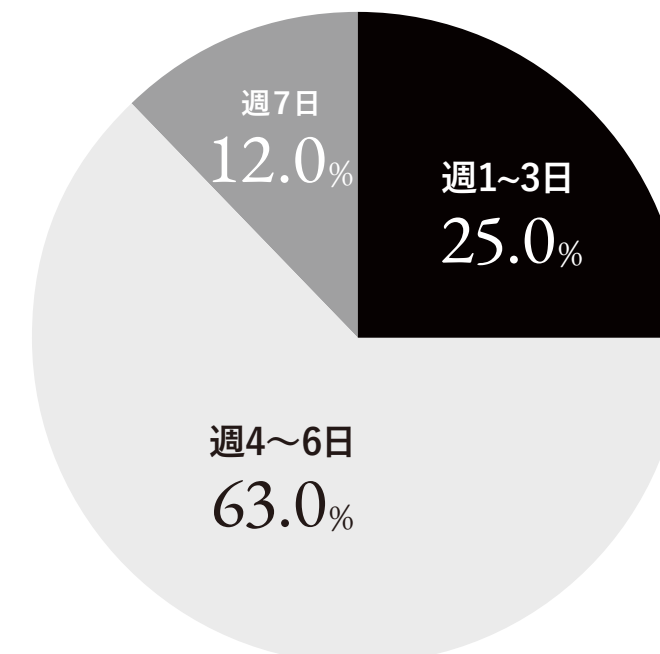
一都三県/受験経験者/子ベース (n=103)



平均通塾頻度

4.5日

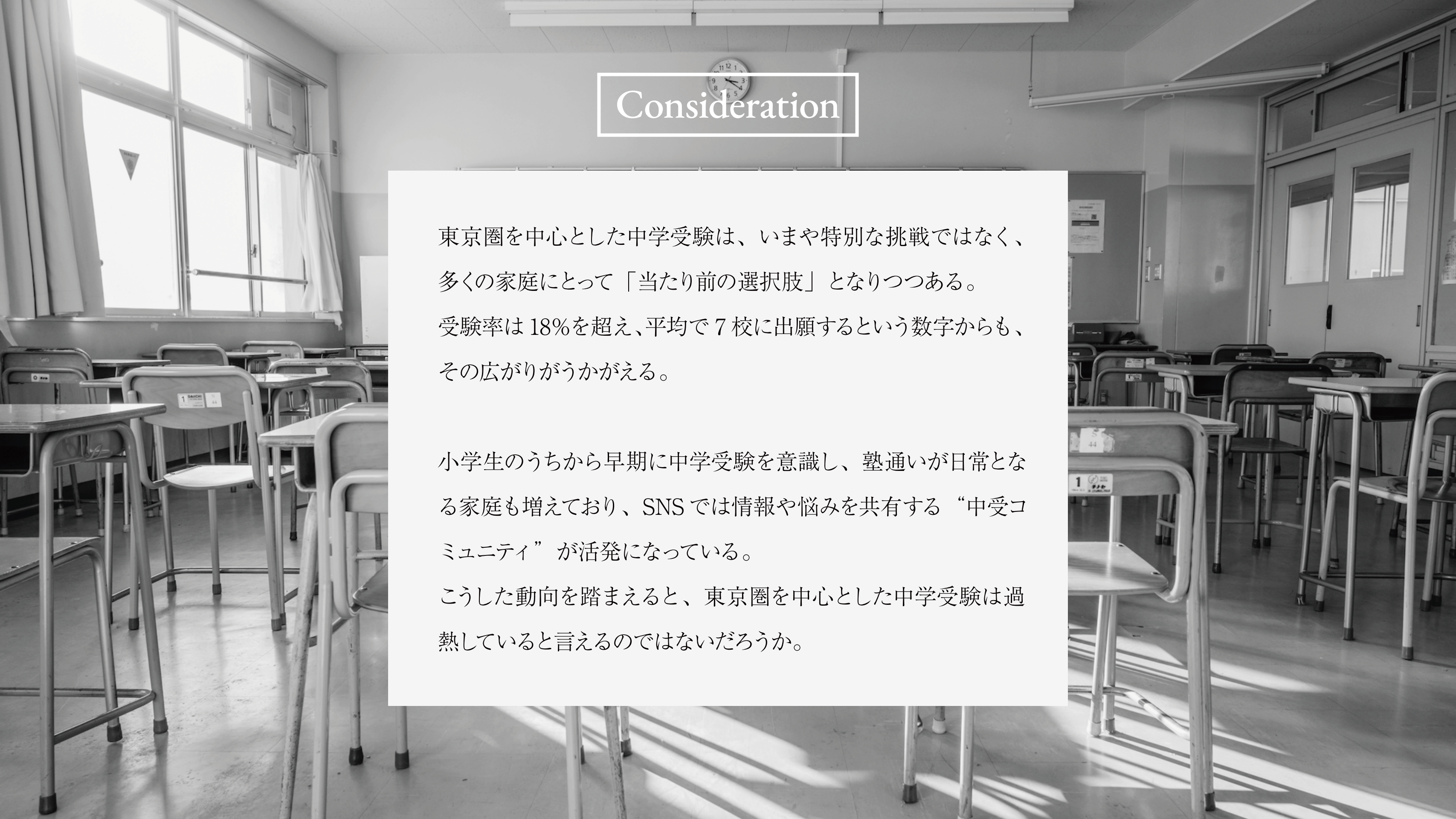
一都三県/受験経験者かつ通塾経験者/
子ベース (n=100)



小学校6年生時の子どもの

平均勉強時間は、平日**3.6時間**/日、休日**5.7時間**/日。

平均通塾頻度は、**4.5日**/週、毎日通塾している子どもは1割強。



Consideration

東京圏を中心とした中学受験は、いまや特別な挑戦ではなく、多くの家庭にとって「当たり前の選択肢」となりつつある。受験率は18%を超え、平均で7校に出願するという数字からも、その広がりがうかがえる。

小学生のうちから早期に中学受験を意識し、塾通いが日常となる家庭も増えており、SNSでは情報や悩みを共有する“中受コミュニティ”が活発になっている。

こうした動向を踏まえると、東京圏を中心とした中学受験は過熱していると言えるのではないだろうか。

論 題 2

挑戦の（価値）と （競争）の副作用

中学受験の評価



論 題 2

中学受験の検討理由

一都三県/受験経験者/親ベース (n=103)



中学受験の動機は、
高校受験の負担回避や親の不安解消もありつつ、
“**子どものため**”を想って。

中学受験納得度

結果への納得度

8.2/10

親

子

8.4/10

過程への納得度

7.3/10

親

子

7.2/10

一都三県/受験経験者/
親ベース (n=103)

一都三県/受験経験者/
子ベース (n=103)

親のホンネ

ここまでやってきたから後に引けない。(埼玉県/40代/母親)

やってきたことを無駄にしたくない。

小学6年年の11月に休んだ時に、それでもやめなかった理由。

(東京都/40代/母親)

また、生声からは「後には引けない」「やってきたことを無駄にしたくない」といった中学受験が持つ構造も浮かび上がってきた。

中学受験の納得度は、親も子も

「結果」に比べて、「過程(勉強)」に少々納得しきれてない。

結果への満足度が高いと「成功」の側面が語られがちだが、
過程の中には、消化しきれていない“想い”や“声”が隠れているのかもしれない。

一都三県/受験経験者/親ベース (n=103)

親にとって成功体験になった

83.5 %

子どもにとって成功体験になった

90.3 %

一都三県/受験経験者/子ベース (n=103)

中学受験を経て、勉強がきらいになった

40.8 %

中学受験を経て、勉強に苦手意識が生まれた

25.2 %

成功体験として昇華される一方で、
勉強嫌いになったり、苦手意識が生まれる子も少なからずいる。

中学受験に後悔あり（52.4%）

半数以上の親が何かしらの後悔を抱えている。

- | | | | | | |
|----|---|-------|----|-----------------------------|-------|
| 1. | 親からのプレッシャーで
子どもがストレスを抱えた | 25.2% | 3. | もっと遊ばせてあげればよかった | 18.4% |
| 2. | 中長期的にみて
子どものためになる習い事
(英語、プログラミングなど)を
やめさせてしまった | 19.4% | 4. | 他の家庭と比べて焦ってしまった | 17.5% |
| | | | 5. | 忙しさを理由に
子どもの気持ちを聞いていなかった | 14.6% |

親が後悔していることは、**プレッシャーをかけてしまったこと。**
次いで、子どもの将来のためになる**習い事をやめさせてしまったこと。**

「血迷った」

成績が下がった時期に、滑り止めよりも低いところを受けるために慌てて見学をしにいった。

(神奈川県/50代/母親)

「数字に追われていた」

偏差値や成績の数字に一喜一憂。

(東京都/40代/母親)

「黒子にはなれない。」

黒子ではない。やっぱり口が出ちゃう。口を出さない方がいいと思っても、言ってしまう。思考を誘導する声掛けをしてしまう。反省している。

(東京都/40代/母親)

「母の狂気」

夫は一步引いてみていた、母の狂気という感じだったと思う。振り返ってもそう感じる事がいっぱいある。

(東京都/40代/母親)

「中学受験は過熱ぎみ」

Xで受験界限で有名な人を見て、勉強法や志望校など、情報収集をしていた。情報収集をすることでその情報に煽られた実感もある。

(神奈川県/40代/母親)

「子どもに言いすぎることについて塾に注意された。」

塾から電話がかかってきて、成績のこと言わないでください悩んでます。と言われた。おそらく娘が塾に相談して。

(東京都/40代/母親)

「志望校に色気が出た。」

最初は偏差値なんて関係なかったけど、想像より上の学校に届くと思うと色気が出てきた。

(東京都/40代/母親)

中学受験に関する、子どもに対する親の後悔

一都三県/受験経験者/親(インタビュー時の生声)

「友達に受かったと嘘をついていた。」

東京は2校とも受かったとウソを。本人は受かるだろうと思っていたと思うから、トラウマだと思う。(東京都/40代/母親)

「がんばらせすぎちゃった。」

中学受験はゴールではない。(東京都/40代/母親)

「子供の逃げ場がない。」

学校にも塾にも。食事の量も減っていた。顔も暗い。
(東京都/40代/母親)

「小学生がやることではない。」

感情のコントロールもまだ簡単ではない年頃なのに。
(東京都/40代/母親)

「ストレスで子どもが髪を抜いていた。」

(東京都/40代/母親)

「姉をかまえなかった後悔」

息子優先になってしまい、姉の部活に顔出せなかったので、かわいそうな思いをさせてしまった。

(東京都/40代/母親)

「受験勉強を機に子どもは子ども部屋から出てこなくなった。」

部屋にこもって勉強していたので、受験が終わった今も一日中部屋にこもり出てこなくなった。

(千葉県/40代/母親)

「燃え尽き症候群になってしまったので、受験させなければよかった。」

小6からの勉強で受かってしまい、入学してからの勉強についていけない。本人は燃え尽き症候群で全く勉強しなくなった。勉強する習慣もついていないので、周りの子がたくさん勉強しているのに大学受験の時に勉強できるのか不安。第一志望には受かったけど、受験させなければよかった。

(千葉県/40代/母親)

親



一都三県/受験経験者/親ベース (n=103)

親の「受験させたい」

95.1%

子



一都三県/受験経験者/子ベース (n=103)

子の「受験したい」

79.6%

ここまで、後悔を抱えていても再受験意向は**親95.1%、子ども79.6%**と高い。

しかし、親子の間には一定の差があり、
考え方や想いに少しのズレがあるのかもしれない。

Consideration

子どものため、そして子どもの希望から始まったはずの受験。
しかし、いつしか「合格」がすべての目的となり、受験そのものが子どもの成長を支える手段ではなく、人生の中心に据えられてしまうことがある。

中学受験は親子にとって様々なフェーズで予想外の困難が潜む茨の道となることも少なくない。その結果、子どもの主体性は薄れ、達成感よりも疲労と虚しさが色濃く残ることも。

受験が「成長の通過点」ではなく「目的地」と化したとき、その道の陰しさがより鮮明に浮かび上がるのかもしれない。

論 題 3

(小 さ な) 心が背負う
(大 き な) 期待
小学生のホンネ



中学受験にまつわる一番つらかったこと

一都三県/受験経験者/子ベース (n=103)

勉強でストレスを
感じるが増えたこと

67.0 %

志望校のレベルに
届かないことへのプレッシャー

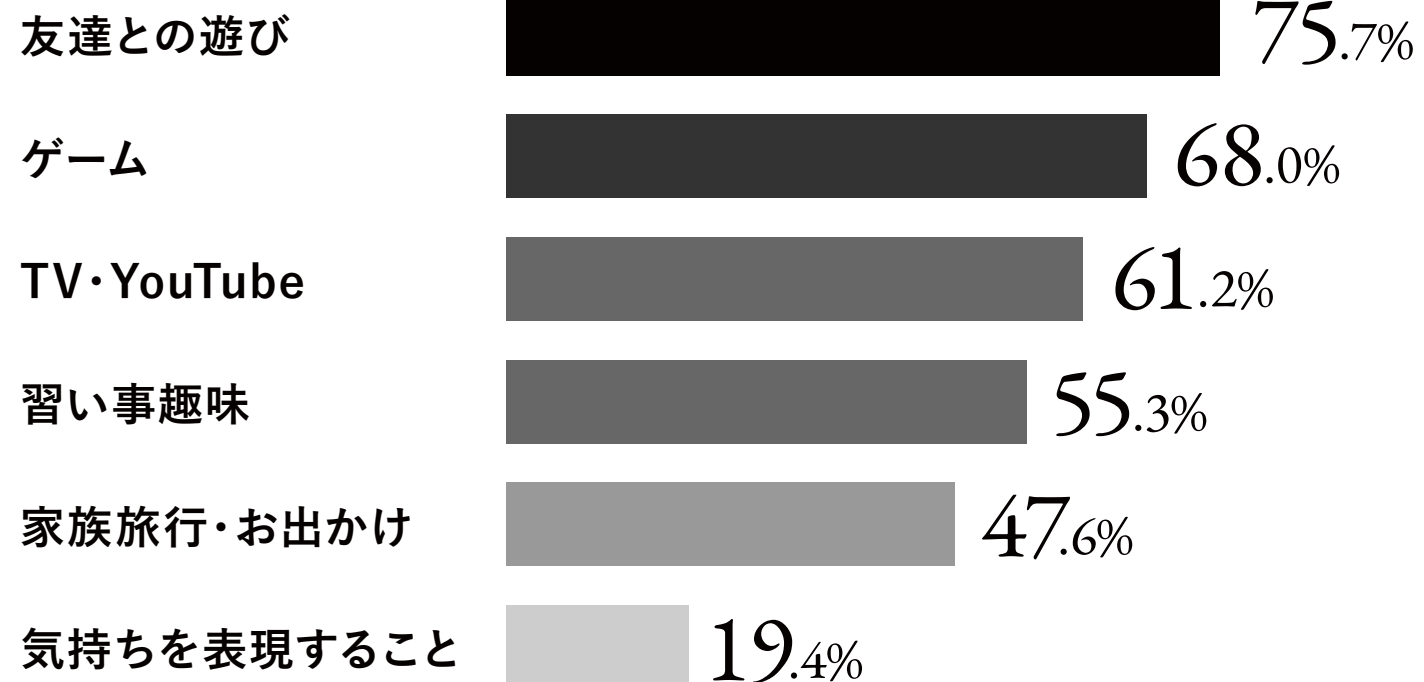
50.5 %

半数以上の子どもが
中学受験の勉強による**ストレス**や
志望校達成への**プレッシャー**を感じている。

論 題 3

中学受験のために我慢したこと

一都三県/受験経験者/子ベース (n=103)



・寝ることもおいて"計算をたこエム"といったこと。
・勉強しても結果がでなかったこと。
・大抵好きなゲームを我慢したこと。

友達とあまり遊ぶべなかったのからさめた。
ゲームとテレビを見たりしたくないように我慢した。

子どもは勉強のためにやりたいことを
我慢せざるを得ない状況にあり、
5人に1人は自分の気持ちも抑え気味。

勉強で努力したり、いい成績をとると
親が喜んでくれるのがうれしい

44.7 %

勉強で先生や親の期待に応えるのが
ストレスに感じるときもある

32.0 %

親をがっかりさせたくない

50.5 %

子どもは親の期待や喜びを重視する一方、
それに**応えることにストレス**を感じることも。

親



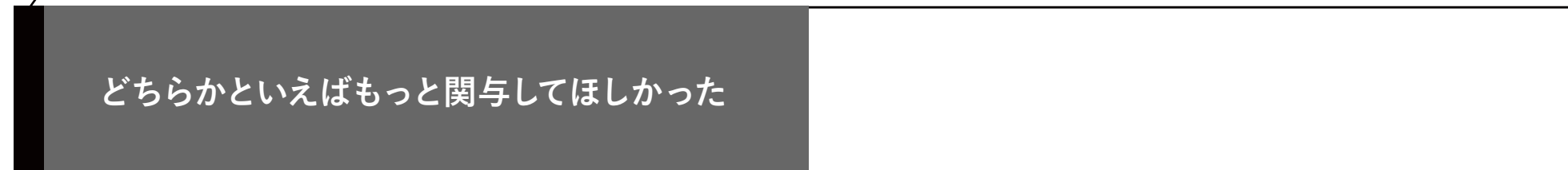
一都三県/受験経験者/親ベース (n=103)

親の「関与した」認識

95.1%

子

もっと関与してほしかった



一都三県/受験経験者/子ベース (n=103)

子の「もっと関与してほしかった」認識

50.5%

中学受験における親の関与度について親の多くが「関与した」、
子どもは半数が「もっと関与してほしかった」と感じており
親の“関与”は必ずしも、子どもの“支え”としては届いていない可能性も。

Interview Case

（子）のホンネと （親）のホンネ



Case 1. 「遊べない子ども」ー 勉強が生活のすべてになる日々

一都三県/受験経験者/子(インタビュー時の生声)

Aちゃん
(中3女子/第一志望合格)

・父に隠れて友だちと遊ぶ

友だちと遊べないことがめちゃくちゃしんどい。
父に隠れて木曜日だけ遊ぶ。
ばれたら「勉強したほうがいいんじゃない?」と
圧をかけられるだろう。

・父親からの言葉が頭をよぎって泣けない

塾は休日8時間、息抜きでマンガを読んでいたら、父から
「勉強しなくていいの?」と呆れられる。
何も知らないくせに、と悔しい思いだが、
父から以前言われた「泣いてやる気が出るならいいわ」の一言が
頭をよぎり、泣きたいにも泣けない。

受験にまつわる一番つらかったこと

一都三県/受験経験者/子ベース(n=103)

「遊ぶ時間がなくなったこと」

77.7%

遊べないことのストレスは計り知れない。
習い事もやめ、**生活のすべてが勉強に**なっていくことから
どうにかして脱出したい子どもたち。

Case 2. 「親子の関係が数字に」—成績の前に、心を見てほしい。

一都三県/受験経験者/親子(インタビュー時の生声)

Bちゃん (中3女子/第一志望以外合格)

・受かんないやバイ

父も母も励ましてはくれたが、周りがどんどん受かっていくとプレッシャーがすごかった。

・相談相手いない

塾の子にもいなくてつらかった。

・自分自身に呆れる

算数が理解できなくて、他の子は解けるのにと自分自身にあきれる。
しょうもないことで家族に逆ギレしてあたってしまう。
母親からの「もうちょっと頑張れたんじゃない？」に
反抗しちゃうけど、反省する。

Bちゃんのお母さん

・合否で初めて泣いた娘

娘は鋼のメンタルだったが、第一志望不合格の結果が出た時は泣いていた。

・娘は気にしない性格

娘は気にしない性格なので塾から「テストできたよー!」と帰ってきても全然できてないじゃん!となる。

・深夜12時までモメる

受験期間はおもた。深夜12時まで、両親vs娘でもめることもあった。

子どもは**プレッシャーと不安**を抱え、相談相手もない孤独感を感じている一方、
親はそこに対する支えの前に「成績」重視。**娘のメンタルの強さも過信してしまう**実態。

Case 3. 「友達が敵になる」一過剰な競争・比較が変えてしまう人間関係

一都三県/受験経験者/親子(インタビュー時の生声)

Cくん

(中2男子/第一志望以外合格)

・友達と話せなくなった

友達と受けると劣等感が生まれる。勉強のことを考えててつらくなりすぎて、家族ぐるみで仲良い友人と話せなくなった。友だちの目が見れなくなる、おはようが言えなくなる。

・受験勉強を一言で言うと、「耐久レース」

耐久レースの中でつらかったポイントは、一緒に受けてる友人がレベルが上がってきたとき。差が開いたときに「劣等感」を感じる。

・無理しすぎな自分

自分にイライラするけど、辛い自分を見せてると本当に辛い気持ちになってしまうから、笑顔にしている。

Cくんのお母さん

・親同士の絆ができた。

休みを合わせて、焼肉を食べて花火をしてという今でも話すような思い出ができた。親を中心に受験組で仲良くなって、支えあった。

・本人はがんばっているつもりだが一緒にやっていた友人と比べるとうちの子はサボっている。

すぐに解き直すべきなのに手をつけなくてサボっていると思った。

友達が比較の対象になってしまう、人間関係も崩れていってしまう。

ましてや親が我が子を友達と比較してしまうと、

子どもの劣等感は増していくばかり。

Conclusion

親子を（追い込む） 中学受験という構造

子どもたちの言葉から滲むのは、「努力しても報われない」「比べられるのがつらい」「親をがっかりさせたくない」という胸の奥に押し込めたホンネである。

勉強の時間が生活の中心を占め、遊びや趣味の時間が削られる中で、子どもたちは「自分の頑張り」と「周囲の期待」の間で揺れている。点数や合否といった結果が、いつしか“自分そのものの価値”と重なっていくような感覚に陥る子も少なくない。

一方で、親の多くは「子どものためを思って」と語り、意識のベクトルは子どもに向いている。しかし、気づけばその戦いは親自身のものにもなることも。子どもの半数は「もっと関与してほしかった」と感じており、その“関わり”は必ずしも心の支えとして届かず、そんな溝が生むすれ違いが、無意識のうちに小さな心を追い込んでいるのかもしれない。

中学受験をめぐる親子の挑戦は、子どもの成長機会にもなり得るが、その舞台となる中学受験の構造自体が、子どもたちの心や成長のリズムに本当に合っているのかは、改めて考える必要がある。

「早く始めた方が有利」「この時期に偏差値が足りないと厳しい」——そんな“成功の方程式”に縛られてはいないだろうか。

本来、子どもの学びは一律ではなく、伸び方も時期もさまざま。その型に合わせようとするうちに、学びの自由さや多様さが削がれてはいないだろうか。

中学受験の構造を現実として受け止めた上で、子どもたちの幸せや学びの意味を改めて考えていきたい。